

研究主題 「生命のかけがえのなさの自覚を深める道徳の時間

—「家族」と関連した指導を通して—

東京都教職員研修センター研修部経営研修課
荒川区立瑞光小学校 教諭 植木 洋

I 研究のねらい

平成10年6月の中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—」では、人間の生命の有限さ、かけがえのなさを理解する機会が失われていることや子どもの命の重さに対する感性が希薄化していることが指摘された。平成16年10月の「児童生徒の問題行動対策重点プログラム(最終まとめ)」でも同様のことが指摘されている。

このような指摘にあるように、生命の有限さやかけがえのなさを理解する機会が失われてきたり、命の重さに対する感性が希薄化していたりしていることが懸念されている児童に、生命のかけがえのなさをいかに自覚させるかが道徳の時間においても大きな課題であると考え。

そこで、本研究では、人間の誕生から死にいたるまでの過程に深くかかわっている「家族」に着目した。「家族」の愛情やきずなを基に、児童に生命のかけがえのなさの自覚を促し、深めさせることができると考え、「生命のかけがえのなさの自覚を深める道徳の時間 —「家族」と関連した指導を通して—」を研究主題として設定した。

II 研究の内容・方法

1 基礎研究

(1) 「生命のかけがえのなさ」の指導について

「かけがえのない」とは、「代わりとなるものがないこと」を意味する。学習指導要領では、「生命のかけがえのなさ」に関する指導は小学校「第5学年及び第6学年の内容」に挙げられ、中学校につながる。本研究では、小学校「第5学年及び第6学年の内容」での「生命のかけがえのなさを自覚できるようにする」の記述から、小学校第5学年及び第6学年の指導を中心に研究を進めることとした。

(2) 「生命尊重」の指導と「家族」との関連

東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課が作成した資料「生命を尊重する態度を育てる指導」では、「生命尊重」と、人間として生きる基盤としての「家族への思い」との指導上の関連を明記している。

また、「中学校学習指導要領解説—道徳編—」の記述から、「生命尊重」の指導と「家族」とは関連が深いことが読み取れる。このことは、「生命尊重」と「家族」を関連付けて指導することの重要性を指摘していると言える。

これらのことから、「生命尊重」の指導に「家族」を関連させることが有効であると考えた。

(3) 本研究における「家族」

本研究における「家族」は、同居や血縁を問わず、児童が家族と考えるすべてを対象とし、「家族」を広義にとらえることとする。

「生命尊重」の指導と「家族」との関連記述

人間は、過去から受け継がれてきた生命の流れの中で生きている。そこで、まず、自分が在るのは、祖父母や父母が在り、そのかけがえのない子どもとして深い愛情をもって育てられたからであることに気付かせることが大切である。(p.54)

自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重する態度を身に付けさせることが大切である。さらに、2や4の視点との関連のもとで、人間の生命は、人間関係の中で保たれるという側面があることも考えさせたい。(p.47)

「中学校学習指導要領解説—道徳編—」
から抜粋

2 調査研究

「生きていることはすばらしい」と思った経験の調査では、「よくある」「わりとある」の回答の合計が72%、「自分の命は家族にとっても大切なものだ」と思った経験の調査では、これらの合計は約58%であった。命の重さという点で考えると、この合計の数値はどちらも決して高いものではないと考える。また、この2つの調査結果の間には中程度の相関(相関係数 0.469)が見られ、関係があることが分かった。

この結果については、多くの児童は経験していても、思いを深めるまでにはいたっていないという要因が大きいのではないかとされる。これらのことから、内容項目3-(2)の道徳の時間

において、児童は、「家族」の愛情やきずなと生命のかかわりを見つめ、これらの経験を深くとらえ直すことで、生命のかけがえのなさを自覚することができるのではないかと考えた。

3 本研究のキーワード

生命の誕生から死にいたるまでの過程を理解することができる第5、6学年においては、「人間の誕生の喜び」や「人間の死の重さ」、「生きることの尊さ」を知ることから、自他の生命を尊重し力強く生きぬこうとする心を育てるとともに、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である。そこで、「人間の誕生の喜び」「人間の死の重さ」「生きることの尊さ」の3点をキーワードとして設定した。3つのキーワードに着目して、「家族」とキーワードを関連させながら、資料の開発、指導過程の作成、発問の工夫を行うことにより、生命のかけがえのなさを自覚を深めていくこととした。

4 実践研究

(1) 「生命尊重」をねらいとした資料の開発

内容項目3-(2)「生命尊重」をねらいとする第5、6学年の副読本資料を分析した結果、その半数近くが「家族」とかかわりがある資料であった。

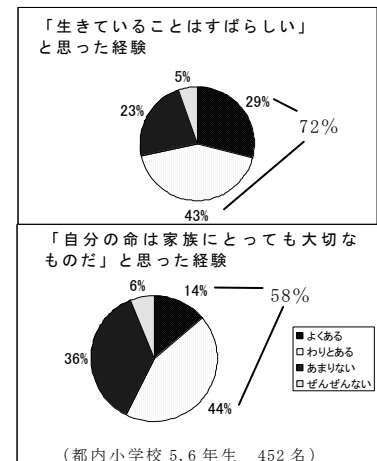
さらに、キーワードをもとに分析した結果、「人間の誕生の喜び」の視点で書かれている資料が、「人間の死の重さ」や「生きることの尊さ」の視点で書かれている資料に比べて少なく、「人間の誕生の喜び」の視点で書かれている副読本資料のほとんどが、出産した母親の気持ちを題材にしたものであった。

人間の誕生は、祖父母や先祖など多くの「家族」にとっても大きな喜びであり、「生命が受け継がれる」という意味もある。これらを考慮し、本研究の「家族」と関連した指導の一つとして、「人間の誕生の喜び」の視点で自作資料を作成した。

(2) 「家族」の愛情やきずなを基に生命のかけがえのなさの自覚を促す指導過程の工夫

「家族」にとって子どもは「かけがえのない存在」であるということをきっかけとし、生命のかけがえのなさの自覚を促し、深めることができると考え、図1の指導過程を作成した。

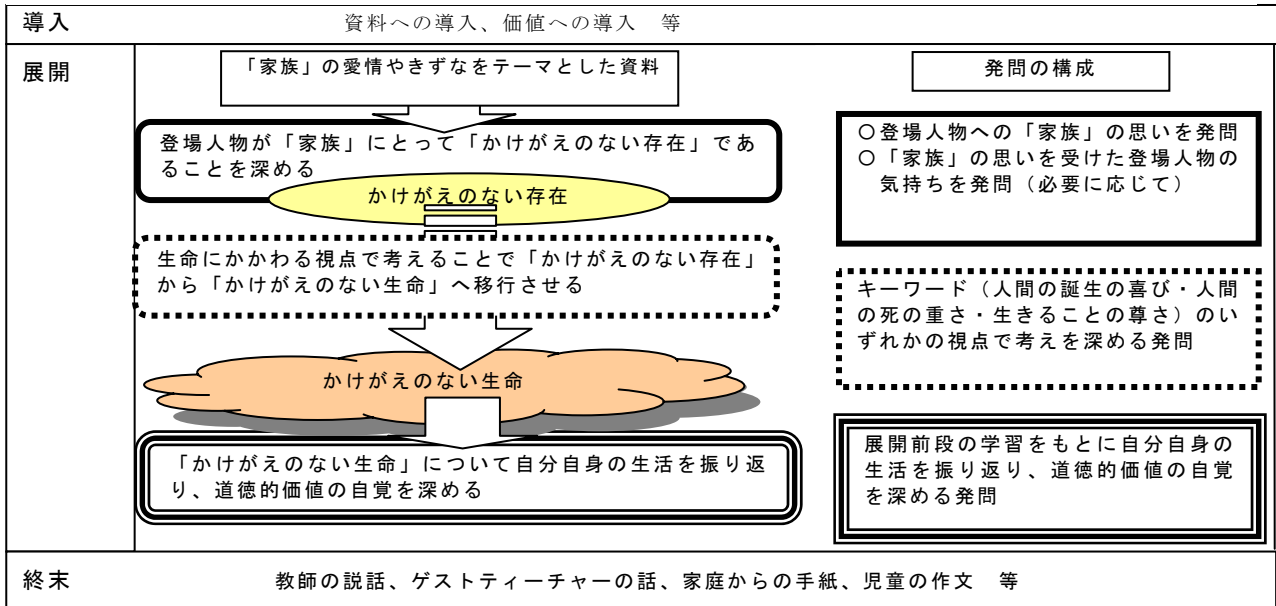
生命にかかわる経験の調査結果



<「家族」の愛情やきずなを基に生命のかけがえのなさの自覚を促す指導過程の活用上のポイント>

- 内容項目3-(2)「生命尊重」をねらいとした資料の中から「家族」の愛情やきずなをテーマとした資料を選択する。
- 資料の内容により3つのキーワードから本時のキーワードを選択し、それを基に発問の構成や発問内容を作成する。
- 資料を基に学習を進める前半の展開では、登場人物が「家族」から深い愛情を受け「かけがえのない存在」とされていることについて十分に考えを深めさせるような発問を構成する。

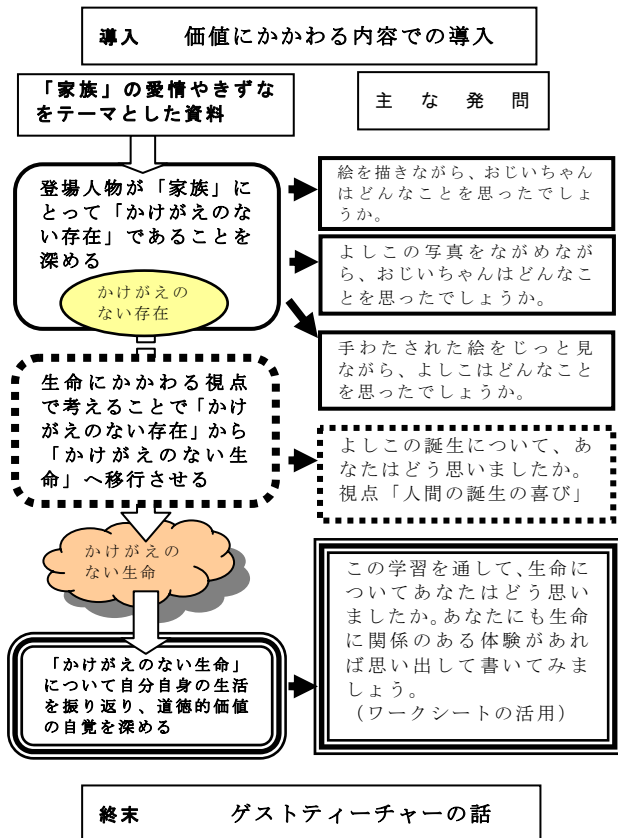
図1 「家族」の愛情やきずなを基に生命のかけがえのなさの自覚を促す指導過程



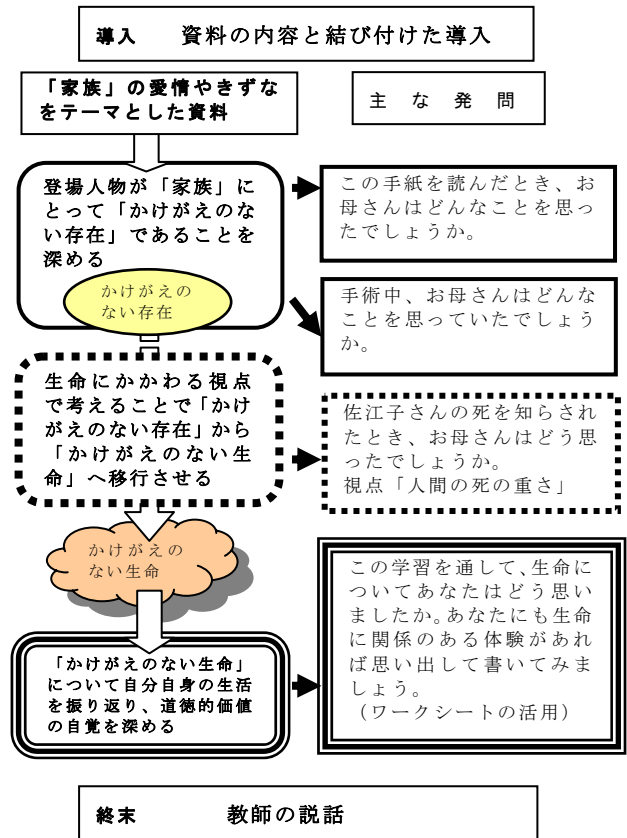
(3) 指導例

図1を基に、キーワード「人間の誕生の喜び」及び「人間の死の重さ」の視点で作成した指導例を以下に示す。

指導例①「人間の誕生の喜び」の視点
資料「おじいちゃんの絵」（自作資料）



指導例②「人間の死の重さ」の視点
資料「お母さんへの手紙」（東京書籍6年）



※「生きることの尊さ」の視点においても同様に指導例を作成できる。

(4) 心情を掘り起こす発問の工夫

これまでの授業では、児童に考えさせたい場面を場面絵等で提示し、登場人物の気持ちや思ったことを問う方法が多用されている。例えば、場面絵を提示し、「このとき、〇〇さんはど

んなことを思っていたでしょうか」と発問し、発問後に話し合いやワークシートの記述を通して考えを深めさせるといった方法である。

本研究の発問の工夫は、場面や登場人物の様子を想像させることから、一連の補助発問や問い返しの発問で登場人物の

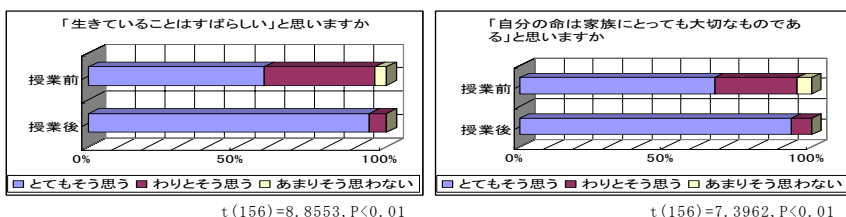
気持ちに迫っていくものである。「死の重さ」や「家族の愛情の深さ」といった児童が言葉で表現しにくい心情を問う場合に、この発問の工夫はより効果的であると考えられる。

Ⅲ 研究の結果と考察

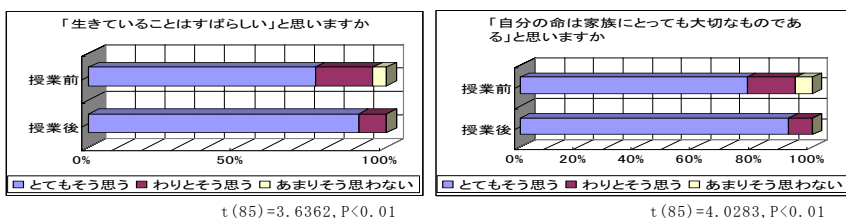
キーワード「人間の死の重さ」の視点（資料「お母さんへの手紙」東京書籍6年）及び、キーワード「人間の誕生の喜び」の視点（資料「おじいちゃんの絵」自作）で作成した指導例でそれぞれ検証授業を行った。

1 資料・指導過程について

資料「お母さんへの手紙」（都内小学校6年生99名、5年生58名、5学級計157名）



資料「おじいちゃんの絵」（都内小学校6年生26名、5年生60名、3学級計86名）



左図のように、授業後には、「生きていくことはすばらしい」、「自分の命は家族にとっても大切なものである」についての回答がともに肯定する方向に大きく変化している。

また、自分自身の生活を振り返り、道徳的価値の自覚を深める際に活用したワークシートでは、全体の6割以上の児童（資料「お母さんへの手紙」の授業では57%、資料「おじいちゃんの絵」の授業では72%）が「家族」とかかわらせて

生命の大切さについて記述し、「家族」の愛情やきずなを見つめ直すことで、生命のかけがえのなさについての認識が深まっている傾向が見られた。

2 心情を掘り起こす発問の工夫について

授業後の聞き取り調査（対象2学級 6年生26名、5年生28名、計54名）では、全児童が、発問に対して考えを深める場面のイメージや考えをもつことができたという回答した。指導にあたった教員からは「これまでの道徳の時間では発言できない児童が発言できた」「場面をイメージすることで考えが深まっていく感じが感じられた」という感想を得た。

Ⅳ 今後の課題

本研究の「家族」と関連した指導は、生命のかけがえのなさの自覚を深める取組みの一例である。今後も授業実践を通して、その有効性の検証を続けたい。

本研究以外にも、生命のかけがえのなさを自覚させる多様な指導方法が考えられる。多様な指導方法を通して、道徳の時間の充実を図る必要がある。

～（場面）のときの〇〇（登場人物）の
 思ったことや気持ちについて深める場合の発問の工夫
 「～のときの〇〇の姿を想像してみましょう」
 一連の補助発問の例
 ○どんな様子が浮かびましたか（背景等を含めた全体的なイメージ）
 ○どんな表情ですか（表情）
 ○どんなことを話していますか（発している言葉）
 ○心の中はどんな気持ちですか・どんなことを思っていますか
 （気持ちや思っていること）
 ※児童の発言において強調された言葉や副詞等に目し、共感的に児童の発言を受けとめ、「どうしてそのように思い浮かべたのですか」「もう少し詳しく説明してみましょう」というように明確にしたり、促したりする問い返しの発問をする。